

確かに義人のための（神の）報復 (pārî) が存在する。彼は神であり、地を審くお方である

この世には不法がたくさん存在する。しかし、人にはそれを正しく裁く公正さが存在しない。この事実はいかに信仰者を悩ませてきたことか！権力者たちの多くは自らの益しか求めないからである。この詩は、神に敵対している人たちに向かい「お前たち」と第二人称複数形で語りかける変わった歌である。（通常第二人称の呼びかけは神に向かう）。6 節までは、これら敵対者に対する言及である。私たちは神に向かって祈るが、嘆きをもって敵対する者たちを神に訴えて良いのである。神に向かう祈りは実に自由である。何事でも神に向かって想いを訴えよう。

7 節から 10 節は敵対者たちへの神の公平な審きを願っている。11 節から 12 節は神を信じる者たちが結果として、公平な神の審きを体験し、喜んでいる様子を述べ、格言的賛美で終わっている。「神に従う人は必ず実を結ぶ。神はいます。神はこの地を裁かれる。」複雑な過程を通して到達した事柄は単純明快である。

1. 神に敵対する者たち

2 節は敵対者への告発である。「お前たちは正しく語り、公平な裁きを行っているのか？」原文は「実に、お前たち沈黙する者たちよ (ēlem)、お前たちは義 (sedeq) を語り (təḏabbērūn)、まっすぐに裁いているのか (mēsārīm tišpəṭū)、アダムの子らよ」である。「沈黙する者」とは不義の前で何の言葉も発せず、行動しない者を意味するが、文脈にそぐわない。そこで、母音を少し変えて、「お前たち神々よ、お前たちはまことに正義を語るのか？ お前たちは真っすぐにアダムの子らを審くのか」とも翻訳可能である（青木澄十郎、NRSV、ヴァイザー）。これは、神と神々との論争、神々を背後に持つこの世の権力者の告発の場面となる。この世の支配者として「神々」であるかのように振る舞い、いかに力を持っているとしても、お前たちは土から造られたアダムの子らに過ぎない。あるいは、アダムの子ら＝人間を正義でもって裁いているのかというように、「アダムの子ら」を裁きの対象と考えることもできる。この告発に続き、宣告がなされる。答えは「ノー」であり、お前たちは、心は (bəlēb) 不正に満ち (ōwlōt)、行動としては (お前たちの業は) この地上で、暴力 (hāmas) であり、(客観的な基準ではなく) 不法な秤で誤魔化している (直訳は「お前たちの手で測っている」)。

そのような神に逆らう者、欺いて語る者は、母親の胎内にいる時から汚らわしく (清い者ではなく)、(正しい道ではなく) 迷いに陥っていると断罪する。現代人には理解しにくい決めつけに聞こえる。神によって義とされる者が生まれる前から選ばれているように、神に逆らう者は彼らの行為以前に、彼らの存在そのものが悪なのである。彼らが悪であるから悪を行うのである。そうであれば、彼らの立ち帰りの可能性は神の手にあるのだろう。5～6 節は猛毒のコブラと蛇使いの比喩が用いられている。コブラは笛の音で踊っているように見えるが、実は、笛に飛びかかろうとしていると言われているが、そのような現代的判断をこの比喩に当てはめて良いのかどうかは不明である。とにかく、彼らは、毒を持つコブラのように、制御不能であるというのであろう。

2. 神の審きを願う

毒蛇が恐ろしいのはその毒であり、噛まれることであるが、神が毒蛇の歯を抜き去ってくれるようにと祈っている。蛇が噛みつくということで連想し、獅子の牙を折ってくれるようにとも願う。覆水盆に返らずというが、水が零れて流れ去るように、義の太陽の光の下でナメクジ（口語訳はかたつむり）のように溶けさるようにと願う。彼らの悪が長続きしないようにとの願いである。同じように、生れて悪をなす前に流産してしまうようにと願っている。あるいは、神の矢に射られて衰えるようにと願う。あるいは、火にかけられた鍋が熱するよりも早く消しさられ、あるいは、鍋の中の煮物が半生のままとなるようにと願う。原語は「いばら」新共同訳は「柴」であるが薪として用いられたもの。これでもかという胸の痛むような諧謔的叙述である。まあ、このような願いを人にぶつけず、神にぶつけるのではあるが！内に籠らず、神に向かって吐き出すことも必要なのだろうか？ アフガン戦争、イラン戦争の時期、日本バプテスト連盟事務所では詩編を毎朝読んで祈っていたが、好戦的で復讐心に溢れた詩編をこのまま読んでいてよいのだろうかという声が上がった。聖書にはそのような好戦的な要素がたくさん登場する。イエス・キリスト証言を中心に全聖書を読まねばならないが、せめて、信仰者は自分たちを神の審判の代理人（agents）と考えてはならないだろう！

3. 神の審判

神に従う者は神に逆らい、信仰者を抑圧する者たちへの最終的な神の応答を見て喜ぶ。神に逆らう者の血で足を洗うと言う凄惨な場面が謳われているが、第1次十字軍は1099年エルサレムの城壁に到着、市内に乱入、住民（イスラム教徒）を無差別に殺し、流された血は膝にまで達したという記述がある。歴史にはこのような凄惨な場面が登場する。やはり、新約聖書の主イエスの到来を待たねばならないだろう。

4. 最後は簡潔な格言のような句である。「アダムは確かに言うであろう、『確かに義人のための（神の）報復・実（pārî）が存在する。「ペリ」が「報復」という意味と「実」という意味があるので、「義人は必ず実を結ぶ」とも、「正しい者には報いがある」（口語訳）とも翻訳可能である。「神が存在する。神は地を審く方である」（'ēlohîm šōpəṭîm bā'āres）。ここに希望がある。